
清廉潔白、なんて嘘。

今ダ 果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清廉潔白、なんて嘘。

【Nコード】

N3953Z

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

屋上でぼーっとしている少年の背後に忍び寄る子が一人。

「清志君のことが前から好きでした、付き合ってください」

中野 清志は絶句した。

高校一年目、五月の後半、告白している女子は彼のクラスメイトの春野 あかり。もはや、名前から想像できる様に美少女と呼ぶことに躊躇いを覚えることを忘れるほどの美少女であった。

要するに美少女から告白された。それも、一年生の中ではぶつちぎりのスペシャルである。

「あの、清志君？」

春野 あかりが上目遣いで様子をうかがってくる。

状況を解説する必要があると言わざるを得ない。現在、授業は四限目を終え、昼休みであった。比較的、校則の緩いこの高校は休み時間には屋上が解放される。四月には目新しさがあったのかはしやいでた俺を含む新入生も二週間もすればその目新しさに飽きたのか屋上を利用する生徒など珍しい部類に属する生徒になっていた。中野 清志は珍しい部類の生徒に属している訳であった。

屋上からグラウンドを見おろしていた。別に陰鬱な気持ちになつていた訳でも、人がゴミのようだと小さく見える他人を見くだしていた訳でもない。ましてや自殺志願者でもなかった。それは一種の癖や習慣みたいなものであった。週に一度か二度屋上に訪れグラウンドを見おろす。理由は無いが少し楽しい気持ちになった。

今日も中野 清志は習慣に基づき、グラウンドを見おろしていた。そうしていると、後ろから聞き覚えのある声を掛けられ。振り向くと共に告白され、今に至る。

「……どうしたんですか？」

繰り返すが絶句している。

おどおどとした、子犬の様な態度で春野 あかりは僕の様子をうかがって来る。まあ、この一文で春野 あかりはどのような人間かわかるだろう。基本的に裏表が無く。弱弱しく庇護欲の掻き立てられるタイプの女性。もちろん、じつは裏表激しく、優等生の仮面を被っているかもしれないが

「大丈夫？」

少し息を吸う。

「ああ、うん、少し驚いただけ」

春野はパチクリと一度、大きくまばたきをし、まあ、要するに僕の返事を待っている。

正直、困った、モテない言い訳に聞こえると思うが今のところ力ノジョなんて欲しいと思っていなかった、ましてや告白『される』なんて想定どころか「俺の辞書にそんな文字は無い」のレベルだった。

どうしよう、ここで時計を確認すれば無礼にあたるのだろうか？ 不敬罪で打ち首だろうか？ そもそも今すぐに返事を返さなければならぬのだろうか？ 被告人、執行猶予をもとむ！？ って感じた。しかしどうするにも、何か言っただけで場を持たせなければならぬ。

「なあ、春野」

「はひー！」

「いや、えーと、そうだなあ」

困った、何を話せばいい？ とにかく一旦逃げたい。教室にでも逃げ込みたい。放課後。

「放課後、どこか、そうだ、新しくできたあそこのファーストフード店なんてどう？」

「……えつと、どこですか？」

……察してくれよ。

「ほら、新しくデパ地下にできた」

「……ごめんなさい、そういうの疎くて」

なるほど、謝られると罪悪感を覚える訳だ。

「そっか、用事とかないなら、一緒に行かない？」

「えっ、まあ、いいですけど」

あれ、あんまり乗り気じゃないな？ 告白されたの僕だよな？

そんなこんなでチャイムがなる。チャイムいい仕事してる。と初めて思った。

返事を聞けなかったことに春野は若干不満気に見えたが。その不満気な表情もハムスターみたいな小動物感があつて可愛さを感じるなんて本人には言えない。

しかし、まあ、冷静に考えれば、執行猶予を言い渡されたただけだ。返事はしなければいけない。

それにあたつて困ったことがある。俺は春野 あかりと言う女性と殆どと言っていい程話したことがない。もちろん、クラスメイトだから、社交辞令程度の挨拶や軽い会話をすることは数回あったが、それでも私的に話したのは今日が初めてである、はず。実はずっと昔の幼馴染なんてことがない限りは。

春野 あかり、本人はかなりの優良物件に思える。ぱつと見ても可愛い。明るい印象を受ける。性格も少なくとも表向きは良い。弁

当も自分で作っていると聞いた事があるところから、料理はある程度できると予測できる。料理ができれば自然と家事も出来るだろう。しかし、全部確証の無い憶測、表面から読み取れる事実で、本当は？　じつは？　裏では？　と言う疑念は振り払えない。まあ、あまり関わったことのない女子しかも美少女、から告白された人間の当然の反応と言えるだろう。美少女だから「はい、オッケー」なんて最近のライトノベルぐらいだろう。疑って当然。変なお遊びに嵌められるより随分とましだ。女って怖いものだろう？

五限目が終わり、

休みに入る。

「よお、清志い、なんかあったの？　元氣ないなあ」

「いや、別に、坂下みたいに元氣いっぱいいつでも幸せの頭空っぽって訳じゃないんだよ」

「えー、私そんな間抜けキャラかなあ」

坂下　真由理、少し間の抜けてるばわばわ系女子である。中学校からずっと同じクラスである。

「見える、見える、馬鹿と間抜けの合成加工物みたいな顔」

「ひっどーい、プンプン」

「プンプンを口で言うあたりがもう」

間抜け感三割り増しだ。

「昼休み、なんかあったのかい？」

「だから、何もねーし」

間抜け。

「悩み事なら相談してちょ」

「悩みじゃねーし、突っ掛かるなよ、暇なのか」

「真由理は清志に相手にされなくてご立腹なのです」

「へいへい」

坂下を軽くあしらう。慣れたものだ。
坂下は基本かまってちゃんだから。
中条君はいいのかい？

放課後。

約束に基づいて春野と一緒にファーストフード店にいた。
会話が無い、僕から話しかけるべきか？ たぶん話しかけるべきだ。
動機、違う、告白した理由を聞こう。そうだ、それにしよう

「春野はどうして僕に告白したの？」

言ってから、野暮な奴だなあと気付く。

「へ？ その、あの、す、好きだからあ」

赤面しながら、だんだん声のボリュームが小さくなっていく。
嘘、だな。

断言できる。

まず、理由がない。接触が無いのだ。一目惚れ？ 確実に無い、
そこまでイケメンじゃない自信がある。

次に返答の間、一度も視線を合わせなかった。1点を見つめてる
訳でもなかった。視線が揺れて1点に定まっていな、動揺している。
分かりやすすぎるぐらいに。

最後に、集中力が散漫になっていること。嘘つきに割りと見られる
兆候だと僕は思っている。

しかし、それを本当のことだという事にして話を続ける。

「ストリートに言われると照れるな、どの辺が僕の魅力なんだい、自分でも良く分からないんだけど？」

声自体はやりわりと攻撃的な言葉を並べる。

「えーと、その」

言葉に詰まる、目も泳いでる。

「……そのお」

「……………」

「あー、もう、いいでしょ。嘘だつて清志君も分かってるよね
なんか怒ってるっぽい。逆切れ、駄目、絶対。」

「うん、まあ、それにしたってなんで嘘でも告白なんて」

できれば学校生活は静かに送りたいのだが。春野は肘を突きあごに手をあて。面倒くさそうな表情を作る。可愛い顔だいなし。

「……疲れるの」

「何が？」

「告白してくる男子を振るの」

贅沢な悩みだこと。

「それで彼氏を作れば告白されることは無くなると思った？」

「そう」

「いつもの性格は猫を被ってるの？」

「そういうつもりは無いけどお……まあ、本音じゃ無いっていうのは確かかなあ」

まあ、そんなに器用には見えないからね。本当に器用なら男子を振るのに疲れを感じることは無いだろうし、こんな方法をとる必要は無いだろうから。

「じゃあ、何で僕を選んだの？」

「ああ」

顔に諦めが浮かんでる。分かりやすい、というか隠す気が無いのだろう。

「見た目も悪くないかなあって思ったし。友達付き合いも問題なさそうで。草食系っぽくて安全そうだし、付き合ったらそのうち好きになれるかもって思えたし」

それだけなら、ほかの男子もほとんど当て嵌まるし。ほら、中条達也とか。

「よく、屋上で一人になって告白するチャンスも多いかなあって思ったから」

こいつ、なんだかんだ御託を並べたけど最後のが9割を占める理由だろうな。

まあ、これで分かったことがある。

「でも失敗だなあ、いい勉強にはなったけど。最後にごめんね清志君、好きじゃないけど彼方と付き合いたいと思ったのは本音だよ」
付き合いたいって言うても害虫避けのためだろ。結局自分の為だろ。

「お金はここに、さようなら」

席を立つ春野 あかり。悲しそうな顔をして……ない。失敗だなあって程度の顔である。

「待って」

春野の、あかりの腕を掴む

「何？」

「流石に返事も聞かないのは失礼じゃないかな？」

「答えはノーでしょ！」
苛立った声を上げる。

「いいや、僕は付き合ってもいいと思ってる」

あかりは目を見開く。

「何で？」

「面白いからさ」

不思議と屋上からグランドを見下ろす時の気持ちに似ていた。

夜。

僕はまたファーストフード店に向かう。

別にあかりの髪の毛を採取しようって訳じゃないぜ。

「やあ、待たせた」

「うっん、今来たところ」

相手は

坂下 真由理。

残念なことに春野 あかりじゃない。

「いやあ、清志とデートなんて久々だねえ」

「そっだなあ」

要するに元カノである。

まあ、俺の辞書に告白『する』の文字はあつた訳だ。

店に入り、Sサイズのドリンクを二つ頼み席に着く。

「清志、そっちから誘っておいてこれは流石にないっす」

ドリンクSだけじゃ不満らしい。

「僕のも飲むか、ほら、一緒にストロー刺して」

「論外だよお」

こっちだつてご立腹だ。

「いや、まあ、新しい彼女できたんだよ、女の子って色々お金掛かるだろ、他の女に金使つてる余裕はないんだぜ」

「へえ、それは、まあ、おめでとう」

少し動揺している様にも見える、わざとらしい。

「で、そうなる様に仕向けたのはお前だろ？」

「へ？ 何のこと？」

別に隠す必要もないのに。

「あいつが僕に告白するように仕向けたのお前だろってこと」

「何で私が清志とあかりちゃんの仲を取り持つ、あっ」

おいおい。

「勝手にボロ出すなよ、僕の考えてきた動機とか推理が台無しだよ、てへっ舌を出して笑う真由理。」

「まあ、形式的に聞くけど、何故、僕が春野 あかりに告白されたことを知っている？」

「実は今日屋上で告白されるのを見ていたのだ！」

「残念ながらお前が昼休みお友達と仲良くお弁当を食べるのを屋上から見てたんだよ」

「えっ、じゃあ、その」

言い訳を考えてる、考えてる。

「嘘だよ」

笑ってネタばらしをする。屋上からホーミングはギリギリ覗くことはできない。

「もしかして、僕は屋上から元カノを未練たらしく見守ってるキャラ扱いなのか？」

「清志は相変わらず意地悪だなあ」

「お前も相変わらず間抜けだよ」

「ちなみに推理って言うのはどういう？ ボロは出してないと思うんだけど？」

「推理があるって言うのは嘘」

まあ、違和感と直感でこいつが裏にいると思った訳だ。

「なん……だと……！？」

おいおい。

「適当に法螺吹いておけばさっさと認めるかなあって」

「やられた、こんな屈辱生まれて初めてだよ」

もはや女のセリフじゃない。

「じゃあ、動機って言うのも嘘」

「いや、そっちはまだ予測できる」

「中条 達也だろ」

「うん、そう」

「あっさり、認めるんだな」

拍子抜けだ。

「認めなかったら、そのまま、話を続けるでしょ？」

「まあ、そうだな」

「それって結構無様じゃん」

単純な話だ、春野 あかりはモテモテで特定の人はいない。中条 達也は春野 あかりが好き。でもって坂下 真由理は中条 達也が好き。だから、単純に春野 あかりに特定の彼氏を作って、中条

君には諦めて貰ったついでに自分の彼氏に出来れば万々歳ってところだろう。

そこで春野 あかりに元カレである僕をプッシュした訳だ。

「清志……」

「何？」

「やっぱ怒ってる？」

「いや、役得なポジションだろ、寧ろうらやましくね？」

「意地悪だね」

「まあただ、協力はして貰うぜ。女の尻に敷かれるぐらいなら寧ろ歓迎だけど。便利品扱いは嫌だからねえ」

「そちも悪じやのお」

「うへへ、お代官様程ではあ」

まあ、やられっぱなし嫌だからねえ。

(後書き)

文章力の無さに全米が泣いた……………訳がない。

趣味程度に書いたらこのざまだよ。

楽しく読むことができたらいいなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3953z/>

清廉潔白、なんて嘘。

2011年12月16日23時50分発行